

オーバーロード　もう  
ひとつの世界からの来  
訪者

上平　英

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

12年間続いたDMMORPG『ユグドラシル』のサービス終了日、もうひとつのDMMORPGもその歴史に幕を閉じようとしていた。

DMMORPGユグドラシルのサービス開始から4年後にサービスが開始され、8年間続いたDMMORPG——『デイスガイア』。

DMMORPGユグドラシルとは別方向に自由度が高く、

『強さこそが全て。ステータスこそ全て』

という、廃人や廃神向けのやり込みゲーだった。

DMMORPGデイスガイアのサービス終了日。

カンストとっていいレベルまで作り上げたキャラクター、アダムの最後を飾るため、竹中 努はデイスガイアにログインする。

——その行動が、後の自身の運命を大きく変える事になるとは知らずに。

※ オリ主最強ものが許容出来ない方は読まない方がいいです。

# 目次

プロローグ	1
第1話 異世界転移？	13
第2話 到着、エ・ランテル	36
第3話 眷属であり、下僕であり、仲間。	62

# プロローグ

——DMMORPG『デイスガイア』

当時、DMMORPGとはユグドラシルのことを差すとまで言われるほど大人気だったDMMORPGユグドラシルとの差別化を図り、他では類を見ないDMMORPGを目指し製作されたDMMORPGである。

DMMORPGデイスガイアをプレイする上で、プレイヤーが選択できる種族は人間、ドワーフやエルフ、ゴブリンやオークなどといった亜人系に、悪魔に天使。そして魔物系と大きく分類され、全ての種族の総数は500種類を超える。

そして、プレイヤーはその選択できる500種類の種族と同時に『称号』を選択する。人間の選択した場合だと『剣士』、『魔法使い』、『盗賊』などだ。

デイスガイアというDMMORPGには、他のDMMORPGなどでよくみられる『職業』<sup>クラス</sup>というシステムは存在しない。原則魔物系の種族を選ばない限り、どんな武器や防具であろうと装備は可能であり、選択したキャラクターの装備適正や能力値にプラス補正を与えるのが、『称号』だった。

以上のことを踏まえて一例をあげると、

称号なしで人間を選択した場合、どんな武器や防具であろうと装備適正は全て100%であり、S〜Fまである武器の適正は全てEとなる。

しかし、ここに『剣士』の称号を付けると、物理攻撃、物理防御、HPの装備適正が105%、魔法攻撃、魔法防御、MPの装備適正が90%となり、『剣』、『斧』、『槍』に對する適正がCになる。

あまり効果がないように思えるが、レベルを上げて上位の称号へと成長させてゆけば、その効果はどこまでも上昇してゆくため、ステータスと同時に重要視される項目である。

一方、魔物系に属する種族を選択した場合、原則として専用の武器や防具以外が装備できなくなる代わりに他の種族よりも様々なボーナスが与えられ、称号もまた、効果の高いものが多い。

そして、これらの要素に加えて、同じ種類に属する武器を使用し続けるだけで装備適正とは別にステータスにボーナスが付く、ウエポンマスタリーというシステムや、同じ特技・魔法を使い続けることで特技・魔法に付く熟練度と呼ばれるレベルが上昇し、威力や効果範囲にボーナスが付くシステムも存在する。

レベル上限は従来のレベル100——多くて300だったのに対して、デイスガイアの場合はレベル上限9999。

さらに転生システムという特殊な仕様により、プレイヤーはレベル1に戻ることでどんな種族にもなることが可能であり、その種族固有の特技だろうと魔法だろうと種族特性だろうと原則習得可能。習得できる上限も存在しない。

しかも、一定のレベルまで上げての転生を繰り返すだけで転生時に割り振れるボーナス値がどんどん溜まってゆき、転生時に溜まったボーナスを割り振るだけでレベル1にしてレベル100相当の能力値を得ることも可能である。

もちろんデメリットも存在する。

いくら転生時にボーナスを振り分けられようと、レベル1に戻ってしまうのだ。高レベルのプレイヤーであればあるほどステータスの落ち込みは大きく、転生を繰り返さない限り転生ボーナスは溜まらない。転生するためには『マナ』と呼ばれるポイントを溜める必要もあり、必要なポイントも転生の回数だけ上昇してゆく。

さらに『おちこぼれ』く『天才』まである転生時の素質で最高位の『天才』として転生させないと、苦勞して上げたウエポン・マス・タリーや特技・魔法のレベルが大幅に減少してしまい、その種族専用の『称号』も付けられなくなってしまう。

こうして見ればデメリットのほうが大きく、初心者やライトなユーザーには必要ないシステムかもしれないが、元々転生システムとはどこまでもやり込みたいユーザーのためのシステムである。

レベルでも時間や手間をかけてキャラクターを育成してゆけば、基礎ステータス値7桁もある超魔王でさえ、素っ裸でも倒せるようになる——というユグドラシルとは別のベクトルのやり込みゲー。

9つのクラスに分けられる装備品にさえレベルとステータスが存在し、「強さこそ全て。ステータスこそ全て」の異色のDMMORPGだった。



常に紫色の分厚い雲によって覆われた空。血が固まって黒くなったような大地。周りに生命の息吹はなく、ただひたすら荒れ果てた大地と薄暗く、気味悪い世界がどこまでも続いていた。

——まるでこの世の終わりのような景色だな。

口調に親しみさえ感じさせる眩きを漏らしながら、荒野をひとり、誰かが歩いている。茶色くくすんだ金髪を短く自然にカットした、金色の瞳を持つ無精ひげを生やした30代前半ぐらいの男性だ。

上下同じ生地だと思われる黒いシャツと長ズボン。その上から金糸の装飾が施された純白のコートを羽織っている。胸には白銀のような煌きを放つ十字架のネックレス。



甲の部分などに魔法金属のプレートが付けられたオープンフィンガーグローブと、スネまで隠す黒のコンバットブーツで身を包んでいる。

一見、無精ひげのだらしない男であるが、顔立ちにはつきりとしていて、一匹オオカミのようなワイルドさを感じさせる美形である。身長も高く、2 m近い。体のほうはやや細めに見えるが、黒のシャツの間から鍛えこまれて発達した筋肉が覗けている。

背中には、男の背丈に近い一振りの長剣が背負われていた。

「あー、これでこのゲームとはおさらばかあ……」

歩みを止めることなく男が呟く。外見にあまり相応しくない、優男風のやや高い声。

「まあ、嫌というほど遊び尽くしたけどさ。出来ればずっとサービス続けて欲しかったなあ」

——DMMORPG、デイスガイア。

男が今現在プレイしているDMMORPGのタイトルの名前である。

そう。今彼がいるこの世の終わりのような場所は現実のものではない。仮想世界に作られた現実とは別の世界であり、ゲームのフィールドだった。

当然、今の姿形もプレイヤーが操るために作成されたキャラクターである。声が外見と一致しないのもそのせいである。

プレイヤー名はアダム。

デイスガイアでも最高ランクの称号、魔王神を持つ悪魔である。

今は人間の姿を取っているが、形態変化で元の姿に戻れば背中から6対12枚の純白の翼が生え、頭上には光の輪が浮ぶ。悪魔というよりも天使のような姿をしている。

DMMORPGデイスガイアの仕様上、どこまでも上げられるステータスはカンストといつていい数値まで達しており、特技・魔法の習得数も最大。ウエポンマスターや特技・魔法に存在するレベルにいたるまで最大値であり、装備するアイテムも規格外の数値を誇るものばかり。

度々発表されていたランキングでもトップ10入りしていた、廃人プレイヤー中の廃人——廃神と称えられるほどのプレイヤーが作り上げたゲームアバターだった。

——しかしそれも、あと数分もすれば、全てが削除されてしまう。

DMMORPGのひとつのタイトルとして8年間サービス続けていたデイスガイアだったが、やはり廃人向けのやり込みゲームの方面に飛び抜けすぎていたため、皆育成がひと段落すると誰もがデイスガイアを止めてしまうのだ。それは年月を積み重ねるたびに増えてゆき、新規のユーザが入っても大抵が数ヶ月、数年が経てば育成に飽きて止めていつてしまう。必然的に廃人・廃神プレイヤーなどやり込みゲームを好み、キャラの育成に満足してないプレイヤーしか残らなくなった。

これまで廃人・廃神共による高額課金によってギリギリのラインで運営されていた

デイスガイアだったが、やはりユーザ数の減少と広大なワールドの維持費、膨大なデータの管理費。これまで高額課金していた廃人・廃神たちの減少などの追いうちがかり、とうとうデイスガイアのサービス終了を発表されたのが——半年前。

サービス終了が発表された当初は各所で廃人・廃神プレイヤーの怒号が響き、各所で最高位特技・魔法が同時使用されたり、オークションで売り出される装備が底値だったりと荒れに荒れていたが、それもサービス終了3ヶ月を迎える頃には収束していた。

やはりデイスガイアのサービス終了発表から数日と経たない内に同メーカーが発表した新作DMMORPGが原因だろう、とアダムは誰もいない荒野でひとり考える。

なんでも新作DMMORPGでは、デイスガイアのサービス終了発表時点までの課金額・プレイ時間・最終ステータスに応じてスタートダッシュボーナスが付くらしい。デイスガイアをプレイしていたプレイヤーたちは今頃ベッドに入って、翌朝6時からサービスが開始する新作DMMORPGへの英気を養っていることだろう。

「はあ……」

今現在のDMMORPGの技術では感情に合わせた表情変化までは再現できないので、表情を変えることなくアダムはため息を吐く。

ため息からは言い表せない悲壮感が漏れ出ていた。

アダムこと——たけな竹中つとむ 努がデイスガイアを始めたのは高校を卒業し、大学に現役合格

して入学式から1ヶ月と経っていない頃であり、丁度デイスガイアのサービスが開始した8年前からである。

大学での4年間、社会人になつての4年間の娯楽はすべてデイスガイアだったと言っても過言ではないほどのめり込んだDMMORPGでもあった。

デイスガイアのサービス終了からすぐに新作DMMORPGのサービスが開始されるからといつても、8年という長い時間を費やしたデイスガイアに対してやはり張り切れない思いがある。

「——けど、仕方ないことなんだよなあ……」

運営はすでにサービス終了を発表している。いくら廃神プレイヤーともてはやされてもユーザのひとりにか過ぎず、サービス終了を撤回させることなんてできる権限も権力もない。

今さらどうしようとデイスガイアの消滅は止められないのだ。

——なら、なぜデイスガイアの、それも世界の終わりのような荒野をひとりで歩いているのか？

それは、これまでの8年間という時間とリアルマネー、育成のために掛かった苦労によつて作り上げたアダムというキャラクターの最後を飾るためだった。

「やっと着いたか。ギリギリだったな」

荒野のど真ん中でピタリとアダムは立ち止まる。アダムの視線の先には荒れ果てた大地の一部が大きく裂け、その間から大きな口を覗かせているクレバスがあった。

大型トラックさえも軽々飲み込めそうなほど大きく裂けたクレバス。上から見ても深さは不明。ステータスがカンストしているアダムの視力を魔法などで最大まで強化しても、クレバスの底は見る事ができない。そもそも、このクレバスには底がないのだ。誤って落ちた場合は自力で這い上がるか、無理なら経験値か金を犠牲にして設定している拠点に戻るしかない。

この世の終わりのような荒野の数箇所だけに存在するクレバス。ゲーム上での設定では世界と世界の綻び、虚数空間、別世界への入り口などといった場所らしい。

このクレバスこそが、アダムの真の目的地であった。

最終的な種族を悪魔、称号を魔王神にした上でステータスをカンストさせたアダムは、デイスガイアの終わりをこのクレバスのなかで飾ろうと考えていたのだ。

「――崩壊する世界から脱出し、新天地を見つけるため、新たなる世界を求めて魔王神は深淵へと飛び降りる」

――なんてな。

詩でも唄うように呟いたアダムはクスリと笑い、サービス終了時間を確認する。――時間はちようど3分を切るところだった。

23 ; 57 ; 06 …… 07、08、09 ……。

無言のままアダムはコンソールを操作し、形態変化を使用する。

するとあらかじめ設定された通り、くすんだ金髪は煌びやかな黄金の輝きを放つ金髪となり、頭上に月の光のような光を放つ輪が出現する。純白のコートからは7対14枚の白い翼が生え、白い光を灯す無数の羽が宙を舞った。

悪魔とは正反対の、天使のような姿に変身し終えると、アダムはゆっくり、倒れるようにクレバスへと飛び降りた。

DMMORPGの仮想現実らしく浮遊感などは感じない。感じるのは軽く下にひっぱられる感覚ぐらいだろうか。

当然、仮想現実だとわかっていたため恐怖はない。あるのは「これで終わりなのか……」という虚脱感や遊びきつたという達成感ぐらい。

クレバスの内部は数十メートルまでは荒野の大地と同じ色の壁が続くが、数百メートルも落ちると周囲は深い闇に覆われ、さらに1キロメートルも落ちると、星空のような煌きによって視界が覆われる。

まるで宇宙のなかにいるような美しい光景。この光景を見るためだけにこのクレバスに飛び込むプレイヤーが続出したほどだった。

星々の輝きに誘われるように、アダムは下へ下へと落ちてゆく。

視界の端にある星がまるで流れ星のように後ろへと流れてゆく。

どこまでも、どこまでも落ちてゆく。

——23；58；22……23、24、25……。

「明日は久々に有給とつて休みにしてあるし、強制ログアウトと同時に仮眠するかあ……」

そして6時前に起きて、事前に登録してるキャラクターの情報を読み込ませて、新作DMMORPGを……、

「——まつ、とにかく。デイスガイアでの冒険は、名残惜しいけどこれで最後か……。——今まで本当にありがとう、デイスガイア。青春時代の大半をデイスガイアで過ごせたことに後悔はないよ」

アダムは笑顔の感情エモーションを出現させ、どこまでも落ちていく。

意識を手放し、睡魔に身を任せる。

——23；59；57……58、59……

——00；00；00

——01、02、03、04……。

——バリッ！

ガラスか何かが割れる音——。

音から遅れてやってくるのは僅かな衝撃――。

本来ならばサービス終了時間と共に行なわれるはずの強制ログアウトを飛び越え、底の無いはずのクレバスの底に、竹中努ことアダムはたどり着いた。

「……………ぐう……………ぐう……………」

……………もつとも、本人はまだ気づいていなかったが。



## 第1話 異世界転移?

「……………どっだ、ハハハ？」

周囲を360度、深い森林に囲まれているアダムは呆然と呟く。

昨夜、デイスガイアのサービス終了と同時に強制ログアウト。そのまま仮眠を取り、あらかじめセツトしている目覚ましで起床、朝食を摂ったら新作DMMORPGでも始める予定だったというのに。目覚めてみれば、周囲を森林に囲まっていた。

しかも、その森林はただの森林ではなかった。

汚染の進んだ現実世界では隔離された施設にでも行かない限り到底見ることはないだろう、ありのままの森林——自然だった。

アダムは今の自身の姿がデイスガイアで使用していたアバターだったこともあり、仮想世界の、新作DMMORPGにそのままデータごと移されたのかとも考えたが、小鳥の囀りや小動物の気配、風に乗ってくる葉の匂い、自由自在に変化する表情などによって、すぐにその考えは打ち消される。

——だったら……ここがDMMORPGの仮想世界ではないとしたら、どこにいることになるんだ？

「……まさか、現実だっていうのか？ いや、そんなはず……ありえない。ファンタジーもののアニメや小説じゃないんだ。いくらなんでも……そう！ 夢だ！ 夢なんだよこれは！」

あはははは、俺としたことが夢の中で何混乱してるんだろなー？

「——天使さま？」

「……へ？」

現実逃避していたアダムに向けられた突然の声。思わず声の方向を振り返ると、小さな子供が立っていた。

子供は女の子のようで、年の頃は大体10歳ぐらい。両腕いっぱいと同じぐらいの長さで統一された木の枝の束——薪にするのだろうか？ を抱えている。

服装は綿でできた粗末な服で、肩下ぐらいまでの髪を後ろで2つに結んでいる。小さな村の子供という言葉が相応しいどこにでもいそうな女の子だ。

もしも目の前の全てが自分の夢だとして、自然はまあ説明がついた。現実世界ではまず見られない森林も、仮想世界ではフィールドのひとつとしてありふれている。匂いや小鳥の囀りなんかも規模は圧倒的に小さいが、現実世界でも見られたことだから。

——しかし、目の前の子供はどうだろうか？

アダムの記憶に目の前の子供に関する情報は何も無い。つまりは初対面だ。ここが

すべて夢の世界だとすると、混乱している最中に会ったこともない子供が突然現れるなんてあり得ない。そもそも夢だった場合、天使さまなんて呼び方で誰かが自分を呼ぶはずがない。天使に見えても、ちゃんとした悪魔なのだから。

女の子をじろじろと観察しながら、恐る恐るアダムは口を開いた。

「……えーつと……キミは誰かな?」

「あたしはネム! ネム・エモットです、天使さま!」

アダムの問いに女の子はハキハキと応える。ネム・エモットという名前らしい。

ネムは両腕いっぱい薪を抱えたまま、目をキラキラさせながらアダムの元へと駆け寄ってくる。

初対面だろうアダム。しかもじろじろと観察するような視線を向けているのに関わらず、ネムは警戒心を抱くことなく——それどころか天使さまと呼び、子犬のような無邪気さで顔を見上げてくる。

その無警戒さに大人であるはずのアダムのほうが戸惑ってしまうが、聞かなければいけないことがあった。アダムは数度呼吸を整え、ネムに警戒心を抱かせないように、優しい口調で訊ねる。

「あ、あのさ……キミはプレイヤーかい?」

「ぶれいやー?」

「……じゃ、じゃあNPC?」

「えぬぴーしー?」

「……」

どちらの問いにも首を傾げるネム。そもそも言葉の意味がわからないといった様子だ。おそらくGMやGMコールについて聞いても先ほどのように首を傾げるだけになるだろう。

仮想現実だけでなく、現実世界でも通じる言葉が通じないことに、アダム不安が益々大きくなる。全身から嫌な汗が分泌され、呼吸が速くなる。とにかく落ち着くように自分に言い聞かせるよう大きく呼吸を繰り返し、アダムは別の質問をネムへと投げかける。

「じゃ、じゃあ……ここがどこか分かるか?」

「村の入り口の森です!」

「……村? えつと……じゃあ村の名前は分かる? できればどこの国の村なのか、名前なんかも教えて欲しいんだけど……」

「はい! 村の名前はカルネ村です! 国は……えーつと……あつ! リ・エステイーゼ王国です!」

ちゃんと答えられたと笑顔を浮べるネムにアダムは「あ、ありがとう……」と小さく

お礼の言葉を言って記憶を探ったが、やはりカルネ村は元より、リ・エステイーゼ王国なんて名前の国に聞き覚えなどはなかった。

気づかない内に新作DMMORPGの世界へアバターと意識ごと移されたのか？

いや、違う……。

周りの森林や風の動きや匂い、小動物の気配などの膨大な情報量を仮想現実で再現できはるはずがない。そしてそもそも、匂いや口の中から感じる唾液の味など、そういう系統の感覚は感じられないよう法律でも定められ、完全にシャットダウンされているはずなのだ。肌から滲む汗なんかも当然DMMORPGでは再現できない。

目の前の女の子に関しても、コロコロと動く表情や小さな呼吸音、服や肌を通して聞えてくる心臓の音、風に乗ってくる匂いなどなど。あまりにもリアルすぎて、仮想現実のものとは思えなかった。

「最後に……ここが、DMMORPGの世界じゃないことを証明できる手段は——」

小声でつぶやいた言葉を止めて、アダムはネムを見下ろす。古着なのか少し大きめ服から覗ける発育の乏しい胸元と白い肌を見て——首を横に振るった。

「ダメだ。いくら夢でもそれは出来ない。……だいたい、俺ってロリコンじゃないし」

「ろりこん?」

「あ、いや……別になんでもないよ。気にしないでくれ」

DMMORPGの世界ではないことを証明する最後の手段として、DMMORPGの一番の違法行為であるR15以上の接触——つまりはネムに対してセクハラすること考えたが、やはり夢だと仮定してもそれは出来なかった。そもそも現実だった場合、その方法は問題がありすぎだ。

がつくりとアダムは肩を落として息を吐く。

「だとしたら……やっぱここは現実世界なのかあ……」

これ以上、現実ではないと証明する手段が思い浮かばないのであれば、現在自身の身に起こっている異常事態を受け入れる他なかった。



「こつちです、天使さま！」

馬車が一台ほど通れるだけ舗装された道を元気いっぱい、ニコニコ笑顔で先導するネム。そのネムの少し後ろをアダムはゆつくりとした歩調でついてゆく。

行き先はもちろんネムの村であるカルネ村。

最初の森林で現在いる世界が現実世界であり、異常事態に巻き込まれていることを受け入れたアダムは、まずは足元を固めようと思ひ、その先駆けとして現在いるだろう異

世界の情報を得るため、ネムにカルネ村までの案内を頼んだのだ。

まあ、案内といってもネムが居た場所は村の入り口近くの森林であり、数分足らずで人の手によつて造られた道に出ることができた。視界にもカルネ村の民家と思わしき建物を捉えることが出来ていたため、あまり案内の必要性はなかったようだが。

アダムはネムの代わりに持っている薪を持ち直しながら口を開く。

「あの、ネムちゃん？ その『天使さま』って呼ぶのは止めてくれないかな？」

「え？ でも、天使さまは天使さまなんですよね？」

「……そうだけど。今はほら、人間の姿だろ？」

「はい。天使つてわかると騒がれるから人間になつてるんだよ……ですよね」

「ああ、そうだよ。だから、人間の姿をとつてるのに天使さま、なんて呼ばれてたら……」

「——あつ！ 天使さまが天使さまだつてことがバレちゃう!？」

ハツと口を両手で押さえるネム。

表情豊かに子供らしい素直なりアクションを見せてくれるネムの姿に、不安でいっぱいだつたアダムの心が少しだけ癒される。

現実世界では26歳だつたアダムだが、結婚を考えるような相手もおらず、両親も肉親もいなかった。毎日毎日会社と家の往復。それが終わるとサービス終了により、ほぼ人がいなくなったデイスガイアでの無意味な育成作業の日々と……。このように気軽

な会話を交わすことなんて随分と久しぶりのことだった。

異世界で初めに出会った相手がこの子で良かったとアダムは微笑み、不安げに顔を見上げてくるネムにうなずいた。

「だから俺のことは『アダム』と呼んでくれ。敬語……畏まった言葉も、難しいなら無理しないでもいいから」

「はいっ、てん……アダムさま！」

「あはは、『さま』も付けなくていいよ。『さん』ぐらいで、な？」

「はいっ、アダムさん！」

「うん、ありがとう、ネムちゃん」

「えへへ……」

顔を赤くして恥ずかしそうにハニカム。

（実際は悪魔……しかも魔王神なんて称号持った悪魔なんだけど。天使のほうがイメー  
ジよさそうだからなあ。この子にはこのまま天使で通しておいたほうがいいだろ）

再び前を向いて先導を始めたネムにわずかばかりの罪悪感を抱きつつ、アダムは思考する。

（とりあえず。異世界の情報はカルネ村の村人たちから得るとして。自分自身の体についてだな。今の体は仮想世界で作成したアバターである『アダム』というキャラクター



のようだけどステータスとか特殊能力とかどうなってるんだ?)

DMMORPGデイスガイアでの『アダム』というキャラクターのステータスはほぼカンストとっていい数値だった。転生システムの使用によって得られるボーナスも最大値であり、レベル1の装備なし、称号による補正なしの状態でありながら全ステータス10000という数値を叩き出していた。

レベル9999である現時点では素のステータスの平均が9桁、HP・MPに関して13桁と10桁。加えて高レベル・高性能の装備品・アビリティならぬ魔ビリティによる強化により、平均11桁のステータス値。MPも12桁台をマークし、HPに限っていえば15桁を記録していた。

最終ステータスの平均11桁、HP15桁という、RPGにしては規格外すぎるだろう数値であるが、デイスガイアとは育成方面に突き抜けたやり込みゲーのDMMORPGタイトル。

そんな数値でさえ、基礎ステータス値に過ぎない。ここに特技・魔法に存在する『熟練度』と呼ばれるレベルに、SとEまであるキャラクターの武器適正、3000まであるウエポンマスタリーなどの強化・補正が入ると、最低位の特殊・魔法でさえ10兆を超える、とんでもないダメージを敵モンスターに与えることが可能だった。

(まさか……。DMMORPGから異世界へのトリップものファンタジー小説のお約束

らしく、ゲームキャラのステータスのまま異世界転移とか言わないよな?)

もしそうだとすると、色んな意味でヤバ過ぎる。

身を守る上では困らないだろうが、何かの拍子で惑星……いや、太陽系破壊なんてことになりかねない。

デイスガイアは魔界や天界が舞台だったこともあり、ボスモンスターなんかは魔王クラスや天使・神クラスが多く、シナリオクエストの後半にも差し掛かると出現するボスモンスターは設定上、星をひとつ支配する・星を碎ける攻撃を放てる・太陽系を破壊できる、とかぶっ飛んだ設定を持っている奴ばかりだった。

——しかし、そんなボスモンスターでさえ、平均ステータスは7桁前後。

11桁の平均ステータスと15桁ものHPを有するアダムにとっては、そんなボスモンスターたちはレベル1の雑魚モンスターと変わらない。

特技や魔法を放つ必要さえなく、通常攻撃を当てるだけでどんなボスモンスターでも即死魔法でも受けたかのように一撃死。

補助魔法などで最大まで強化されたボスモンスターの最強特技・魔法でさえ、魔ビリティなどの特殊能力で無効化する以前に素のステータスだけでノーダメージ。

属性魔法や毒などの状態異常系の攻撃に対する対策にも余念がなく——というか、やり込みプレイヤー魂が発動し、転生時特典などのシステムや、称号にプラス補正をかけ

るシステムをフル活用した結果、全属性・全状態異常系魔法及び効果に対する耐性は、装備なしでも99%。しかもここにその他種族への転生によつて取得でき、最大30種類まで同時に効果を発動させることのできる『魔ビリティ』というシステムを使用することにより、全属性に対する魔法・効果、状態異常系にいたるまで、その全てが自動で無効化され、本来ならば耐性を持つことすら不可能なはずの無属性魔法に分類される属性魔法にさえ、99%の耐性を有している。

もはや運営がイベント用モンスターとして出現させた平均ステータス8桁、HP18桁という超ド級モンスターでさえ、全てを極めつくした廃神プレイヤーの前ではHPの少し多い雑魚モンスターにしか過ぎないのである。

(まさかまさかまさか……カンスト状態のまま異世界トリップつてのはいくらなんでもありえないよな? 平均11桁のステータスだぞ、11桁! 超巨大なモンスターも宇宙最強魔王の称号を持つモンスターでさえ物理的に一撃死させることのできる壊れステータスのアバターなんだぞ?! ……絶対世界からの補正が入ってるはずだよな? ステータス100分の1とか、1000分の1とか、アイテムなし、蘇生なしとか……世界の修正力? 抑止力だったかで弱体化されてるはずだよな? きつと、そうなんだよな!!)

ダラダラと顔から汗を流しながら、アダムは自分自身に意識を向け、

「あは……あははは……」

——思わず笑い声を漏らしてしまう。

(なんだよ、これ!!? なんだんだよこれ!!? ふぎけてる! 絶対ふぎけてるだろっ!!?)

心の中で誰に向って罵声を飛ばすアダム。

自身の体に意識を向けて感じたのは——思わず笑い声を漏らしてしまうほどの力だった。

(……ヤバい! ヤバいヤバいヤバい……っ! いくらなんでも絶対ヤバすぎるだろ、これ……。たぶん、俺。かるーく殴っただけでこの大陸……というか星を破壊できちゃうぞ? っ—か、できるって確信してる。少し前までは自分の本当の体じゃなかったのに……。元々の自分の体だったように違和感なんてものもなく、体の使い方なんてものまで分かってやがる。——それに、それにだ……。世界からの抑止力っぽい力だと思いが、全体の力から1%程度……はつきり言って知覚するのがやつとなレベルで一応弱体化させられてるっぽい)

もつと仕事しろよ、世界の抑止力エ……。

思わず空を見上げ、異世界……世界に向ってため息を吐くアダムだったが、こればかりは無理な話だ。

いくら世界に抑止力が存在していても限度というものがある。惑星を丸まる支配で

きる魔王クラスや天使・神クラスだけでなく、太陽系をも一撃で消滅させられる力をするボスモンスターでさえ通常攻撃を1回当てただけで消滅させることができる、壊れステータスと装備、そしてデイスガイアに存在する魔ビリティを全て保有し、常時30種類もの魔ビリティを発動させている存在を、ひとつの世界の抑止力で抑えることなど不可能なのだ。逆に1%だけでも弱体化させられていることに対して称賛の言葉を贈るべきである。

(ああ……特技や魔法も問題なく使えるんだな……)

転生を繰り返して、デイスガイア上に存在する特技・魔法の全てを習得していたアダム。コンソールが存在しない今では特技・魔法の使用法について不明だったが、使い方を思い浮かべれば、忘れていたのを思い出すように使用法が伝わってくる。

しかし、やはりと言うか。全ての特技・魔法を習得しているといっても、魔物系でもその種族になっていない場合のみ使用可能な固有特技までは使用することはできないようだ。まあ、それでも使える特技・魔法は1000種類以上あるが。

デイスガイアでは威力調整などなく、自身のステータスと使用する特技・魔法のレベル、相手のステータスにより、相手のHPを大きく超える無慈悲なダメージをモンスターに与えていたが、やはり特技・魔法レベル……熟練度99の効果なのだろうか？

感覚を頼りに予想すると威力の調整も可能らしい。まさに使い慣れている、という表

現が合っているような感覚だった。

(あとはアイテム……装備品だが、やっぱりか)

現在身につけている自身の最強装備。デイスガイアで最高ランクの世界級装備アイテム——それも最大レベルであるレベル300まで強化済みであり、武器に宿すことで追加で強化することのできるイノセンスはそれぞれカンストと云っていい数値。さらにアバターの全装備適性値300%があるため、そこに×3が加わった数値が加算される。まさに魔神プレイヤーのフル装備といってもいい壊れ性能を有した装備アイテムの数々だが——それさえも従来の性能と殆ど変わらない性能を有しているようだった。

おそらく装備アイテムだけでなく、他のアイテムも従来の性能を、現実世界のものに合わせた状態で存在し、使用できるんだろう。

(アイテムボックスの有無を確認する必要があるが……ここではやらないほうがいいか)

デイスガイアではコンソールを操作して開くことの出来たアイテムボックス。コンソールを操作してアイテムボックスのウインドを開く際、空中に穴が空き、イベントリを確認することができた。

もしもアイテムボックスを開けた場合、空中に穴が空き、それをネムやカルネ村の人間に見られる可能性が高かったため、試すことは諦めた。

カルネ村を視界に入れながらネムと会話を交わし、そのなかで異世界の情報を収集していると、ネムが突然村の入り口へ向って大声をあげる。

「あつ！ お姉ちゃんだ！ おねーちゃん！」

ネムが手を振っているほうへ視線を向けると、後ろで髪をみつあみにして縛っている女の子が村の入り口に立っていた。

ネムの6つ年上の姉であるエンリ・エモットだ。

ネムはアダムを置き去りにしてエンリに向かって元気に駆け出す。

元氣よく自分の元へやって来たネムをエンリは両手で抱き止め、少し膝を曲げて視線を同じ高さにしてから口を開く。

「ネムー！ いつもより遅いから心配したじゃないの！」

「ゴ、ゴメンなさい」

素直に頭を下げるネムだが、すぐに顔を輝かせエンリの服を引っ張った。後ろを歩いているだろうアダムのほうを片手で指差し、呟く。

「お客さん！ お客さんだよ、お姉ちゃん」

「お客さん？ あの人のことよね？ ……冒険者さんなの？」

薪を片手で持ち、ゆっくりとした足取りでカルネ村へと歩くアダムをエンリは警戒しつつも、観察するように見つめる。

カルネ村は帝国との国境近くに存在する小さな村であるため、村にやってくる者は限られる。

年に一度だけ訪れる徴税吏か、村の近くの森林に薬草採取に時々やって来る薬師、薬師の護衛の冒険者に、たまたま通りかがる行商人かである。

ネムがお客さんだと言ったアダムは、背中に立派な長剣を背負っているものの、黒のシャツとパンツの上から純白のコートと、まるで街中を歩くような格好であり、薬師の護衛として時々訪れる冒険者とは装備そのものがあまりにも違いすぎたため、冒険者なのかとエンリは首をかしげた。

しかし、冒険者でないのなら誰が来たというのだ？

近づくにつれてハッキリと見えてくるアダムの姿。純白のコートに施された細かな金の装飾や十字架を象つた精巧なネックレスなど、エンリが見たこともないような——しかし、その価値がとんでもなく高いことだけはわかる服装や装飾品を付けていることに、エンリは今までの生で感じたこともない不安や畏怖にも近い恐怖心を抱き始める。無意識にネムの体を引き寄せ、盾になるように顔を上げる。

顔を強張らせ、警戒心をむき出しにするエンリに向つて、ネムが慌てて口を開く。

「アダムさんはてん……じゃなかった。えっと、迷子なんだって」

「……迷子？」



妹が来訪者の名前を気軽に呼んだことに対して思うところもあったが、迷子という言葉が引つかかった。

見たところアダムの年齢は30手前か30前半ぐらいの大人である。しかも服装や装飾品はエンリから見てもとんでもなく高価なものだとわかるぐらい。

脳裏に貴族という言葉が浮んだが、貴族が剣を背負い、付き人も護衛もなしに行動するとは思えなかった。

モンスターや亜人に襲われて仲間と逸れたにしても、服装が綺麗すぎる。

そもそもの話、エンリにはアダムが迷子になるような人物には見えなかった。

アダムに対して警戒心と共に不信感を強めたエンリは、いつでも村のなかへ駆けだせるように立ち上がる。

どうやら村のほうも村へ向って真っ直ぐ歩いてくるアダムを発見し、その冒険者には似つかわしくない服装に目立つ純白のコート姿に警戒心を抱いたようだ。チラツと後ろを見ると、村の大人が鍬や鎌を手にしていて家々の影から自分たちに向って村のなかへ戻るよう手招きをしていた。

ネムを抱えて村のなかに逃げ込んだほうが――。

そんな考えが浮かんだ瞬間だった。

「あの、よ……? えっと、ネムのお姉さんだよな?」

「ッ」

いつの間にか距離を詰めたアダムが、エンリに向つて声をかけた。

エンリはアダムを無視してネムを抱えて逃げることもできたが、相手に悪い印象を与えてしまう。

アダムが本当に迷子……遭難者であり、もしも貴族だった場合、家族だけでなく他の村人の命さえも危ないのだ。

貴族の気まぐれで村人が殺されたり、美しい容姿を持つ村娘が貴族に召し上げられ、散々弄ばれたあげく、ボロ雑巾のように棄てられた話なんてものはよく聞く話だ。

貴族だと仮定すると、無視して立ち去るといふ無礼は絶対に許されない。

エンリはバクバクとなる心臓を無理矢理鎮めて静かにうなずいた。無礼にならないよう、使い慣れない畏まった話し方を意識しながら慎重に口を開く。

「はい。ネムの姉の、エンリ・エモットといいます」

初対面から無警戒だったネムと違い、見るからに警戒心・不信心、その他諸々を抱いていることが丸分かりなエンリに向つて敵意はないとアダムは微笑みを浮べるが——逆にそれが警戒心や不信心を強めてしまったようだ。

ネムを胸に抱きかかえて2歩ほど後ろへと下がってしまった。

16歳の女の子。女子高校生ぐらいのエンリに微笑みを浮べて後ずさりされたアダ

ムの心に冷たい風が吹く。

しかし、落ち込んではいられない。

アダムは下手な微笑みは止めてつぶやく。

「俺の名前はアダム。古代の遺跡を調査したり研究する学者なんだが、遺跡の調査中に遺跡に仕掛けられてた転移魔法が発動しちまってな。知らない土地に飛ばされちまつたようで遭難……まあ、迷子なんだよ」

簡単な自己紹介と自身の現状について語ったアダムだが、そのほとんど嘘である。

やはり異世界からやって来た天使に見える悪魔……なんて正直に話しても信じてもらえないだろうし、厄介なことになると思い、不自然すぎない設定をカルネ村へ向う道中、ネムと会話を交わしながら同考えておいたのだ。

魔法の有無に関しては、村へ向う途中で交わしたネムとの会話から確認済みである。

何でもこの世界では魔法使いは魔法詠唱者と呼ばれ、デイスガイアのメガ、オメガ、テラ、ペタ、ゼタなどの階級ではなく、位階と呼ばれる階級によって魔法の威力や種類などが区分されるらしい。

ちなみにネムの話によるとカルネ村に度々訪れる薬師の青年、ンフィーレアがその魔法詠唱者らしく、昔からネムの姉であるエンリに片想いしているらしい。しかし、ンフィーレアは奥手で意気地がないらしく、未だにエンリには男として見られておらず、

たまーに勇気を振り絞って告白まがいの発言をしてもスルーされてしまうのだとか。酷い情報漏洩である。

「……転移魔法、ですか？」

「ん？ 知らないか？ 魔法の一種で、人や物を遠く離れた場所に飛ばすやつなんだが……」

「……はい」

「そうか……。まあ、それも仕方ないか。珍しい魔法だからな」  
肩をすくませ息を吐く。

まるでこの世界の魔法を知っているような口ぶりであるが、これは演技である。例えこの世界に転移魔法が存在していなくても関係ない。今はエンリを初めとした村人に不信感を抱かれすぎないように、遭難した言い訳を作っておくことが重要だった。

アダムの説明に加え、服装や外見とは違い、友好的で柔らかな態度にエンリから警戒心が少しだけ薄れる。

再び警戒心を抱かれられないよう、アダムは追い討ちをかけるように口を開く。

「ああ、そういえばこの薪はどうすりゃいいんだ？ 家まで運ぶか？」

アダムの問いにネムがハキハキトした口調で応えて頭を下げる。

「いえ、ここらまで大丈夫です！ ありがとうございます、アダムさん」

「別に構わないさ。ちゃんと村まで案内してもらったんだからな」

そう言つてアダムは片手に担いでいた木の枝の束——薪をネムに手渡す。

薪を手渡して微笑むアダムに、エンリが目を大きくさせた。

「えっ……!!? ここまで代わりに持つてくれてたんですか!？」

「ああ? ……あー、村までの道案内のお礼さ。気にするな」

「……は、はい。ありがとうございます」

村人の荷物を代わりに持つ? もしかして貴族じゃないの?

アダムに頭を下げながらエンリがそんな疑問を抱いていると、村のほうから誰かがやつて来る。

背後から——カルネ村の方向から聞える足音にエンリが振り返ると、村長が立っていた。

「エンリ。ネムを連れて家に戻りなさい」

「村長さん……。はい、わかりました。行くよ、ネム」

エンリはうなずき、村長に言われた通りネムを引き連れて村へと向う。手を繋いでいるネムがアダムに向つて名残惜しそうな視線を向けたが構つてなどいられなかった。今の村長は普段の優しい村長とは違つて真剣な表情をしていたからだ。



村の中からやって来た村長にアダムはエンリやネムにした説明を行なったあと。アダムは周辺の地理——近くの村や街、国の名前などについて教えてもらえないかと村長に訊ねた。

訊ねられたカルネ村の村長はというと、アダムの説明にあつた転移魔法に関することについてはあまり理解出来なかつたが、アダムが周辺の地理だけでなく、王国や帝国、法  
国さえも知らない遭難者であることだけはしっかりと理解できていた。

村長はアダムに向つて「それは大変でしたな」と同情するように呟くと笑顔で頷いた。周辺国の名前や領土が大まかに書かれた地図があるからと、アダムを村の集会場へと案内し始める。

その見るからに怪しげなよそ者を簡単に村への立ち入りを認める辺り、村長としてあまりにも警戒心が薄いようにも見えるが、これは村人たちの安全を考えてのこと。

高価な服や装飾品で身を包み、背中の長剣で武装までしているアダムの申し出を断わるのは村人からすればあまりにも愚かな行為であり、何も食料や命など大切なものを渡せと言われているわけでもないのだ。

誰でも知ってるだろう、周辺の地理や存在する国の名前ぐらい教えてやっても辺境の

村であるカルネ村には損は無い。むしろそれで何事もなく村から立ちつてくれるのなら——と、村長は考えていた。

そして、案の定村長の考えは当たりだったようで。周辺国の位置や村から一番近い都市を教えると、その都市であるエ・ランテルへ向うため、その日の内にアダムはカルネ村をあとにした。

一応、村長からエ・ランテルへ向う最短ルートを通っても人の足では1日以上かかり、その途中の森林ではゴブリンやオークといった亜人に出くわすとも教えられたが、反則レベルのステータスを有するアダムにとっては些細なことであり、思ったよりも規模の小さかった村で情報収集するよりも、エ・ランテルという都市で情報収集することが最優先だった。

## 第2話 到着、エ・ランテル

カルネ村から一番近い都市である城塞都市エ・ランテルへ向うため、カルネ村から出発してから数時間。高い位置にあった太陽も地平線への彼方へと傾きつつあり、周囲は深い闇に包まれようとしていた。

「これ以上進むのは危険か……」

現在歩いている道の周囲は、森林と森林の境目にある草原。このまま完全に日が沈むまで歩き続けて、光が殆ど差し込まない森林でキャンプするより、モンスターの襲撃などが察知しやすく、星や月の光が差し込みやすい草原でキャンプしたほうが安全だろう。

(……まっ、現実世界の自分ならともかく、デイスガイアのカンストステータスとアイテム装備してる『アダム』ならどんな危険地帯だろうと平気だろうがな)

身体能力の高さを地味に感じさせてくれる体に向つてため息を吐く。ここまで数時間、休憩無しで歩き続けていたが全く疲労感はなく、長時間歩いたという感覚すらなかった。さすがはカンストしてるステータス。おそらくモンスターが現れても、変わらずその力を発揮してくれることだろう。



故に、こんな人気無い、いつモンスターが襲ってくるかもわからない森林や草原に  
囲まれた場所においても恐怖心は微塵も感じていなかった。

道の両端に広がっている草原でキャンプすることに決めたアダムは、エ・ランテルに  
続く道から出て、ここまで歩きながら確認した、デイスガイアで所持していたアイテム  
がそのまま詰まっているアイテムボックスを開いた。

虚空へと突っ込んでいるアダムの手の上に表示されたアイテムボックス。現在所持  
しているアイテムとして映し出されているものは、その大半が正方形の倉庫のような建  
物だった。

それらの建物の下、アイテム名が表示されている場所には、『武器(剣)』、『武器(拳)』  
や、『防具(上)』、『防具(下)』、『アクセサリー(頭)』、『アクセサリー(手袋)』など、  
ひとつひとつに名前が分けられて表示されていた。

これらのアイテムは、デイスガイアで『倉庫』と呼ばれていたアイテムである。ひと  
つの倉庫につき、収納できるアイテムは500と多く、アイテムの重量による制限など  
はない。唯一、『倉庫』に入れているアイテムはショートカットキーに登録できないとい  
うデメリットが存在するが、HP・MPと規格外なまでに高く、NPCやプレイヤーが  
作成できる回復アイテムではスズメの涙ほどの効果しかなく、状態異常も自前の魔法で  
治せるトッププレイヤーたちにとって、そのデメリットもないに等しい。

一応、その性能ゆえに課金アイテムと呼ばれる代物ではあったが、錬金術師系の最上位称号 + アイテム作成系の錬度 + レアアイテム + デイスガイアの通貨を揃えれば幾らでも作成可能のアイテムであり、キャラの育成が進み、準廃人ラクスと呼ばれるようになってからは、課金せずに何度も『倉庫』を自作し、回復アイテム、各種装備品、貴重品、素材アイテムなどに振り分けてアイテムボックスを埋めていた。

アダムはアイテムボックスに表示されている『倉庫』のなかでも『キャンプ系1』と銘うたれた倉庫を選択する。

どうやらデイスガイアと同じく、『倉庫』を具現化せずとも『倉庫』の中身だけを取り出せるらしい。『倉庫』で埋め尽くされていたアイテムボックスから、『キャンプ系1』の中に入れていたアイテムへと表示が切り替わる。

「えーっと、安全地帯を作り出すアイテムで見られても不自然じゃないものは……やっぱりテントか寝袋ぐらかい。他は『小城』、『砦』、『塔』、『ログハウス』なんてのあるが、これは見つかったらマズそうだよなあ……」

——「いつの間にこんな建造物が建つたんだ!？」と驚かれたり、遠くから見られて「なんだあの建物は!？」……なんて警戒されたり、質問攻めに遭うだろうことは簡単に想像できたため、建造物系は候補から除外した。

そうなる結局、選択肢は2つになった。『テント』か『寝袋』かだ。どちらも1人用

のものであり、どちらもデイスガイアの初期に使用することの多い、安いもの。

仮想世界はともかく、現実世界においてキャンプ初体験であるアダムは『テント』を選択したい気分だったが、あいにく手持ちの『テント』は消耗品に属するアイテムだった。最大8時間使用し続けることが出来、レベル30までのモンスターを寄せつけないが、1回使用すれば消えてしまう。

一方、『寝袋』はゲームスタート時に支給されるもので使用回数や連続使用時間に限度はない。デメリットは自身のレベル以下のモンスターからの襲撃を受けやすいことと、所詮寝袋なので、寝ているところが丸見えなどところだ。

さらに付け加えると、どちらもデイスガイアに存在したどの街でもNPCから購入可能なアイテムだった。

アダムはアイテムボックス内の『倉庫』に表示されている『テント』と『寝袋』の間で、しばらく指をさ迷わせ——結局、使用限度のない『寝袋』を選択した。

アイテムボックス——見た目は空間の狭間から『寝袋』を取り出し、「おお……」っと声を漏す。仮想世界では感じなかった『寝袋』の手触り。簡単な造りではあるが、その縫い目は細かく、臭いがした。

「まさか現実仕様ってと……か……」

改めてゲーム内のアイテムが現実のものへと変化していることに驚きを感じつつ、比

較的綺麗に見えた草原に『寝袋』を敷く。

そして、寝袋に入ろうとして——動きを止めた。

ゲーム内では『寝袋』に入るときも関係なく装備は付けたままでよかったが、現実仕様となっている現在ではどうなのだろう？

背中に背負っている長剣はもちろん。今日は数時間、満足に舗装もされていない道を歩き続けていたため、靴には少なからずドロなどが付着していた。このまま汚れた靴で『寝袋』を使用するのは、生粋の日本人だったアダムには出来なかった。

アダムは靴を脱ぐと、それを長剣と一緒にアイテムボックスへ仕舞い、改めて寝袋に入った。

やっと一息つけると、仰向けで空を見上げ、

「——っ」

——声を失った。

異世界に飛ばされ、青く澄んだ空や青々とした森林、草原や小動物など、ありのままの自然の姿に感動していたが、今、目の前にある光景は——星空は言葉を失うほど美しいものだった。

「うわぁー……」

顎に無精ヒゲを生やした30代前半ぐらいの男の姿に反し、まるで子供のよう

を漏らしてしまうアダム。

言葉では表現できない感動が、汚染の進んだ現実世界でも仮想世界でも決して見るこ  
とのできない幻想的で美しい光景がそこには広がっていた。

アダムは美しい星空を見つめ、しばらくしたあと、ゆっくりと息を吐く。

「なんだか異世界に転移したことか、現実世界とかどうでもよくなってきたなあ……」  
とりあえずエ・ランテルという都市で世界の情報を集め、これからどうするかを決め  
ようかと思っていたアダムだったが、この目の前に広がる星空をひとりで見上げている  
と、その全てがどうでもいいように思えてきた。

現実世界においてアダムこと、竹中 努にはすでに親しい親類はおろか親兄弟も存在  
しない。親しい友達もそこまでおらず、今までの人生で彼女すら出来たこともない。育  
ての親で今は亡き祖父からそのまま受け継いだ会社では一応社長という立場にあつた  
が、所詮はお飾り。業務の殆どは祖父の右腕で友人だった副社長が取り仕切り、自分の  
仕事といえば判子押しや他の会社のお偉いさんなどの接待、たまに受けるTVや雑誌  
の取材を前もって渡された台詞に従って受け答える程度。さらに祖父の力で大学卒  
業から入社4年で社長まで出世したため、同世代からのやつかみも強く、幹部たちから  
も年若く、実績もない社長として扱いに困ると疎まれていた。

まあ、それでも。同世代の社会人とは比べものにならない高い給料を貰っていたこと

や、一企業の社長という立場にいれたことには感謝し、満足もしていた。

現在おかれているような、異世界転移などというファンタジックな目にでも遭わない限り、一生お飾りの社長として流されるまま、なに不自由なく暮らしていたことだろう。そんな、流されていた人生だったからか。

竹中 努は、現実世界に対して未練などというものを微塵も感じていなかった。

「ふうー……」

汚染が進んだ現実社会では見ることが叶わなくなった月を見上げ、「わかりやすい人生の転機が訪れたな」と、小さく息を吐く。

「……どうせならもう一度、この世界で『アダム』として生きなおすのもいいかもな」

人間だった『竹中 努』を捨て、悪魔の『アダム』として。

右も左も分からない、文明や社会についても分からない、全く未知の異世界で生きる。

——おもしろそうだ。

アダムは大きく口の端を吊り上げ、笑みを浮かべた。

明日中には着くだろうエ・ランテルで起きるだろう出来事に少年のように夢を馳せ、寝ようとして、

「そーいや、デイスガイアの基になったゲームの原作本がなかったか？」

100年以上前、ある会社が打ち出したRPG、『魔界戦記デイスガイア』。当時では

考えられなかった魔王が主役のゲームであり、レベルの限界が9999、最大ダメージ1億ごえなど、従来のゲームに見られないシステムが多数搭載されていたことから人気が火がつき、2、3と数々の続編が生み出された大人気タイトルだった。

DMMORPGデイスガイアはそれらのゲームと、同社が打ち出したゲームを基にして作成されたDMMORPGであり、システムについても似通った点が多かった。

そして、DMMORPGデイスガイアの有料コンテンツに電子書籍——ゲーム内で読むことの出来る本に『魔界戦記デイスガイア』のストーリーを小説版にしたものが存在していた。

アダムはアイテムボックスに手を突っ込み、『本1』と名前が表示されている『倉庫』から原作本を取り出す。原作本のサイズは文庫本程度の小さいものだ。

「ああ、これだな。『魔界戦記デイスガイア』。とりあえず4までであるが、まずは1作目の主人公が活躍するヤツから読むか」

アダムは寝ることを止め、うつ伏せになって原作本を読み始める。

——もしかしたら、異世界の仕組みや自身の体の仕組みが分かる情報が載ってるかもしれないと考えて。



「ふあああ……ねむ……」

寝袋から出て靴を履き、昇り始めた朝日に向ってアダムはあくびをかみ殺す。

あれから日が昇るまで仮想世界において購入済みだった小説版『魔界戦記デイスガイア』シリーズだけでなく、同社から発売されていたゲームの小説版まで読み耽り、悪魔の体や特性について色々と考察し続けたため、結局アダムは徹夜するハメとなつてしまった。

朝日を浴びて小動物たちが目覚めるなか、寝袋に潜り込みたいという欲求に駆られるアダムだが、実際のところ眠気も疲労もほとんど感じていない。

「やっぱりの眠気つてのも人間だったころの名残りとかか？ それとも悪魔にも睡眠が必要だったりするのかわ？」

本当の悪魔は睡眠や食欲なんてなかったりするのかわ？

様々な憶測が脳内で飛び交うなか、痒くもない頭をかいて、いつものようにノビをする。

『アダム』という悪魔になってまだ2日目。違和感なく自分の体として動かしているが、未だにその限界をアダムは知らず、習性や体質なんかも分からないことだらけである。

夜通し『魔界戦記デイスガイア』を読んだが、色々と大雑把だったり、小説とゲーム



では設定のかみ合わないところが見受けられたりと、結局悪魔の体についてはよく理解する事が出来なかつた。

唯一の収穫といえば、戦闘モードぐらいだろうか？ 小説の一文にあつた「戦闘モードに入れば自然と傷を負わなくなり、力を発揮できる」というもの。おそらく現在、戦闘モードではないため、カンストしてるステータスでも物を掴めたりと、何不自由なく生活できているのだろうとアダムは考える。

しかし、まあ、あくまで情報源は原作小説のなかの文章である。信憑性はあまりないため信用し過ぎないほうがいいだろう。

それに悪魔の肉体だとすると、その寿命は人間のときとは比較にならないだろうほど長いだろうし、「これからゆっくり知ってゆけばいいか」とアダムは考えるのを止めた。それはかつてのわからない異世界においてあまりにも楽観的な考えのようにも思えたが、それだけの自信や安心感を与えてくれるだけの肉体やアイテムがアダムには存在していた。

今もカルネ村の村長から聞いた、ゴブリンやオークといったモンスターからの襲撃を頭の隅に追いやり、「腹が減ったからとりあえず朝食を食う」という能動的な思考に素直に従い、アイテムボックスを開く。

『食べ物』と銘うたれた『倉庫』は、DMMORPGディスプレイで手に入っていた様々

な食品によつて、500ある枠の全てが埋まっていた。

元々アダムは、回復系アイテムは常に最大数のストックを維持、素材アイテムも最大数、キリのいい数量を常にキープ。必要なくても所持するアイテムのストックは最大数所持という、ある種の几帳面さをもつてディスガイアをプレイしていたため、『食べ物1』に入っている食品も様々であり、ひとつの枠に入れておけるストック数も最大である30個。しかもキリよくするために同じ食品が5枠——常に150個所持していた。

アダムはそのキリのいい数字を減らし、また、異世界においてその数字を戻せない可能性があることに若干の躊躇いを感じたが——やはり感じた空腹には逆らえない。

腹が減った。だから、食う。食つて何が悪い。

相変わらずの思考回路である。

アダムはそんな思考を行なう現在の自分にやれやれだと首を振り——同時に「これこそ悪魔」、「別に食品のひとつぐらいいだろ」などとも思う。

そして、結局のところ——食べ物を見つけれない、見つける方法がわからない現在において、アイテムボックスに存在する食材や食品を食う以外の選択は最初からありえないのである。

（遅かれ早かれ、食うことにはなってるんだ。気にしてもしょうがないだろ）

自分にそう言い聞かせ、アイテムボックスの腕を動かす。

表示されている食品からひとつを選び、取り出す。

「やっぱり。実際に食うとしたらコレだよな」

取り出したものは、大きな骨に付いた巨大な肉の塊。

そう、漫画でお馴染み、『漫画肉』とも呼ばれる『骨付き肉』である。

朝食としては重過ぎるメニューだろうが、やはりアイテムが現実仕様になっているとすれば、食わずにはいられない。

「ああ……いい匂いだ。滴る肉汁といい、そのまま切り取って焼いたような見た目といい、最高だな」

直径30cm以上はあるだろう肉の塊を前に大量の涎が分泌される。焼き具合は丁度食べごろのミディアムレア。しかも今焼けたばかりのよう——観察もそこそこに喰らいつく。

「お、おおっ……！」

さらに溢れる肉汁。舌から口いっぱい広がる肉の味。香辛料の匂いが鼻から抜けてゆく。

噛みごたえも十分、「肉を食ってる」という表現がもつともふさわしく、これまで食べてきた肉とは比べものにならないほど美味だった。

すべてのDMMOにおいて再現すら禁止されていた感覚——味覚や嗅覚が正常に機

能していることに感謝し、アダムは夢中で骨付き肉に喰らいついた。

骨を含めて3キロはありそうな骨付き肉を5分と掛からず食べ終えたアダムは、残った『骨』というアイテムをアイテムボックスへとしまい、次は飲み物だとアイテムボックスを漁り始める。

『飲み物1』と銘うたれた『倉庫』を開き、ストック数が表示されていない水の入ったピッチャーを取り出した。

——ピッチャー：オブ・エンドレス・ウォーター  
無限の水差し。

正確には食品系に分類されるアイテムではない、魔法のアイテム。

ピッチャーから清潔な水が無限に湧き続け、永延に使えることからアダムは飲み物系を仕舞っている『飲み物1』のトップに仕舞っていた。

アダムは直接ピッチャーに口を付け、水を飲んで一息つく。

「あー、食った食った」

森から聞える自然の音楽やのどかな自然の風景を楽しみながら、食後の余韻に酔いれる。

デイスガイアで存在した食事や喉の乾きというシステム。果てしなく続くダンジョンを潜り続けたり、周回し続けたりといったデイスガイアにおいて、それらは多くのプレイヤーに対して足かせとなっていたが、こうして仮想世界が現実となり、味も食感も

感じられている今ならば、無駄とも思えた100種類近い食品数や様々な飲み物、食材が存在していたことは幸運なのだろう。

「——さてと、腹ごなしも済んだことだし、歩くか」

『寝袋』をアイテムボックスへ仕舞い、長剣を背負ったアダムは、再びエ・ランテルへ続く道を歩き始めた。



隣国バハルス帝国、スレイン法国との要所となる境界に位置するリ・エステイーズ王国の都市、エ・ランテルは三重の城壁に囲まれ、見た目通りに城塞都市の名を冠している。

城壁を2つの城壁を越え、最後の壁との間に存在する区画は、市民のために存在するエリアであり、エ・ランテルで街といえ、一般的にこの区画のことを思い浮かべる。

そんな区画に点在する広場の中で最も大きく、中央広場と呼ばれる場所には、幾人も露天商が店を開き、様々な野菜や調理済みの食料などの多様な商品を店頭に並べていた。

「おおお……すごいな」

まるで映画やファンタジー小説に迷い込んだみたいだ——などと、もう何度目になるか分からないのん気な感想を漏らすのは、30代前半ぐらいの男。

茶色くくすんだ金髪は短く、自然にカットされており、瞳の色は金色。彫りが深く、整った顔立ちをしているが、顎に生やした無精ヒゲが持ち前の素材の良さを打ち消している。上下同じ生地だと思われる黒いシャツと長ズボンに、豪華な金糸の刺繍が施された純白のコートを羽織り、胸には白銀のような煌きを放つ十字架のネックレス。甲の部分などに魔法金属のプレートが付けられたオープンフィンガーグローブと、スネまで隠す黒のコンバットブーツで身を包んでいる。

——悪魔であり、『魔王神』の称号を持つ、アダムである。

あれから歩くことさらに数時間、太陽が真上からやや下へ下がった頃。ようやくアダムはエ・ランテルへ到着した。

2つの外壁を潜り、街への中央へとやって来たアダムは瞳を輝かせ、物珍しそうに広場を見渡した。

せわしなく行きかう様々な格好、肌色、髪の色をした人々や中央広場に開かれた商店に並べられている、見たこともない野菜や元いた世界で食べていた野菜や果物。

道行く人ごみの中、威勢よく呼び声を投げかける店主に、店主との間で値段交渉をしたり、少しでも新鮮な食材を探す婦人たち。

所々で香ってくる食べ物の匂い。

仮想世界にも同じような光景は存在したが、ここに存在するものはすべて現実のものだとはつきりわかる光景だった。

誰しもが個々としての意思を、魂を持ち、この世界を現実として必死に生きている。

「……やっぱり現実なんだよな、ここは」

中央広場を前に立ち尽くしている新顔のアダムに向って、訝しげな視線を集める人々。

その羽織っている純白のコートを見て、あるものは隣国、スレイン法国に存在する陽光聖典という特殊部隊を連想させたが、陽光聖典に属する者がひとりでエ・ランテルなんかにはやってくるわけがないとすぐ首を振る。しかし、警戒だけはしておこうと目だけは外さない。

アダムはそんな誤解を受けていることなど露知らず、フツと小さく鼻を鳴らす。

——未だにどこかゲーム感覚だった自分を嗤うように。

「……とりあえず。こつちの金はねえから、まずは換金からだな」

エ・ランテルの城門を潜る際、貴金属や宝石を換金できる場所はないかと門番の兵士に訊ねて教えてもらった、冒険者組合。

冒険者と呼ばれる、モンスター討伐などの荒事を専門に行なう荒くれ者共が集まって

結成されたギルドであり、アダム自身もファンタジー小説やゲームなどで馴染みのあった組織である。

アダムはその冒険者組合の建物が中央広場にあると聞いて、ここまでやって来たのである。

門番の兵士の話によると、冒険者組合ではモンスターから剥ぎ取れる素材や薬草、鉱石にいたるまで基本的に何でも買い取ってもらえ、さらにモンスターを討伐したあと、その体の一部を切り取ってもっていけば褒賞がもらえるそうだ。

エ・ランテルまでの道中、不思議とモンスターと出会うことがなく、草や木々も何があ金になったり、なんの効果も発揮してくれないか分からなかったために何一つ採集しなかったため、デイスガイアで元々所持していたアイテムぐらしか売れるものはなかったが、素材アイテムとして所持している宝石類は高く売れるだろうとふんでいた。

そして買取りと同時に、出来たら冒険者として登録してもらおうともアダムは考えていた。



日もだいぶ傾き、行きかう人々も減り始め、次々に商店が店じまいの準備を始めた頃。



ようやく買取りと冒険者登録を終えたアダムは冒険者組合をあとにして、登録の際に受付嬢から教えてもらった宿屋へ向うため、通りを歩き始めた。

宿屋へ向うアダムの足取りは軽い。さほど広くもない通りをひとりで歩きつつ、純白のコートの内側に仕舞った、金貨や銀貨がたんまり詰まった小袋を片手で何度も弄ぶ。

「あんな最低級の素材アイテムひとつでこんなにもらえるなんてな、くくくく……」  
デイスガイアでは価値がなく、売るほうが逆に無駄になる素材アイテムだった小さい宝石が、金貨や銀貨に変わったことに笑いが止まらないといった様子だ。

しかし、異世界での宝石の価値がどの程度かわからないため、実際の価値よりもだいぶ安く買い取られた可能性も否定できなかつたが——元々アダムには必要ない素材アイテムだったため、それについてはどうでもよかつた。ようは宿代や飲食代を払うためのこの世界で使える金があれば良いのである。

石畳の敷かれた道を過ぎ、舗装されていないボコボコの泥道を歩き続けていると、目的の宿屋の目印として教えられた「絵」を発見した。

会話することに問題なくとも、この世界の文字の読み書きが出来ないアダム。宿屋の目印が「絵」であったことに感謝しつつ、2段ほどの階段を上がる。西部劇などで見かけるウエスタンドアを押し開け、店内に入った。

明り取りの窓がほとんど下ろされているため、店内は日の落ちかけた外とあまり変わ

らない暗さだ。

ギルドの受付嬢の話では、1階が酒場になっており、2階、3階部分が宿屋という話だった。

広い室内に何卓も置かれた丸テーブルには客の姿がちらほら。酒場らしく、テーブルの上には酒や料理が置かれている。冒険者ご用達の宿屋らしく、テーブルについて食事をしている客のほとんどが男であり、暴力の傍に身を置いている者に相応しい空気に包まれていた。

先ほどまでガヤガヤと騒がしく飲み食いしていた男たちの視線が、新たに入店したアダムへと向けられる。そこには値踏みをするような粘りつくものが多く含まれていた。そんな宿屋の景色に、アダムは瞳を輝かせる。

(すごく汚ねえところだが、これぞ酒場って感じだよなー。デイスガイアでの酒場を思い出すな、これは)

床にぶちまけられた何かの食べカス、同じく床に溜まった何かの液体、壁に出来た奇妙な染み、隅のほうで溜まっている固まってカビの生えた何か……。

デイスガイアで最も治安の悪いとされた街の酒場兼宿屋では、これらに加えて何かの肉片やゲル状の液体、食材用にゾンビが絞められた状態で吊るされ、目玉や腕といったパーツなどが床に転がっていた。

確かに、異世界の酒場からは仮想世界の際には感じられなかった違う汚さを感じるが、デイスガイアの混沌とした酒場と比べると綺麗な部類に入り、眉を顰めるほどではなかった。

アダムは観察もそこに切り上げ、店の奥へ向う。

薄汚れた前掛けをして、露出している肌にくつつもの傷跡が見えるスキンヘッドの男の前で立ち止まる。

店の主人というより、用心棒が似合ってそうな厳つい顔のした筋骨隆々の男が、アダムに向って口を開く。

「宿か？」

割れ鐘を彷彿とさせる濁声にアダムは頷いた。

「何泊だ？」

「とりあえず、1泊で頼む」

厳つい顔の主人はそう答えたアダムの胸——白銀のネックレスではなく、冒険者として登録した際に貰い、首から下げるように言われたプレート——を見て、「……銅のプレートか。相部屋で1日5銅貨だ」とぶっきらぼうに言う。

「出来ればひとり部屋がいいんだが、部屋はないのか？」

微かに鼻で笑った声が聞える。

「……この街に冒険者ご用達の宿屋が3軒ある。その中で1番したが俺の店なんだが……組合の人間にここを紹介されたんだろうが、どうしてだか分かるか？」

「ここを紹介された理由か……」

アダムは少し考え、思いついたことを素直に答える。

「1番宿賃や食事代が安いからか？」

「……あ？ ああ……そりゃあ、まあ、他の宿屋より安いことには違いねえがよ……。他にもあんだろ？ 冒険者になったばかりの銅のプレート。ひとり……」

意外と親切だった宿屋の主人からそこまでヒントを貰って、アダムはようやく理解する。

「——仲間……。冒険者としての人脈作りか」

それで正解だと主人がうなづくのを確認し、アダムは相部屋の利点を思い浮かべる。

冒険者としての人脈の構築、最新の情報の交換、冒険者としての知恵を学ぶことできたりと——なるほど、冒険者になったばかりの駆け出しは相部屋のほうがいいだろう。駆け出しなら取られて困る貴重品や金なんかも持ってないだろうし。

——しかしだ。

「それでも、ひとり部屋にしてくれないか？」

「人の親切を無碍にする気かてめえ……!？」

店の主人の眉が危険な角度で吊りあがり、殺気の籠もった鋭い視線を向けられる。

(……現実世界じゃチビってたんだろが、今じゃ何も感じないな。恐怖心が麻痺してるっていうか、かなり凶太い精神になってるみたいだ)

ドスの聞いた声と殺気の籠もった視線を受けても、余裕な態度を崩さないアダムを見て、ほう、と主人から感嘆の呼吸が微かに漏れ出る。

「親切には感謝してる——が、仲間はもういるからな。ここで見つけようとは思ってないんだ。ま、冒険者同士の情報交換には惹かれるところだが、それは明日組合のほうでするつもりだからな」

アダムの言葉に主人の眉が元の位置まで戻り、目から殺気が消える。その変わりようの早さに「やっぱり試してたのか、食えなさそうなおっさんだ」とアダムは心の中でため息を吐く。

「そりゃあ結構なことだが、お仲間ね……。なんで一緒に行動してないかは聞かねえで置いてやるよ。1日6銅貨。当然、前払いでだ」

アダムはコートの中に仕舞ってる小袋を漁り、金貨と銀貨に埋もれている銅貨を6枚引っ張り出して、差し出された主人の手に乗せた。

「確かに。あと、食事をしたときはこのカウンターにいるヤツか、俺に頼みな。当然、飯や酒の料金は宿代と別だ」

銅貨を確認した主人はカウンターの上にぱちんと音を立てて小さな鍵を置いた。

「部屋は階段上がって左の一番奥の部屋だ。寝台に備え付けてある宝箱に荷物は入れろ。言わなくてもわかってると思うが、他人の部屋には近づくな。勘違いでもされたら厄介なことになるからな。精々気をつけるこつた」

「ああ、ありがとう」

「けっ……」

お礼に対して顔を背けた主人から部屋の鍵を受け取り、アダムはさっそく階段を上がった部屋へ向っていった。



アダムの姿が2階に消えると、いつもより静かだった店内が騒がしさを取り戻す。

「やっぱ貴族か？」

「そうだな。あんな精巧な刺繍……しかも金糸がふんだんに使われた純白のコートなんて着れるのは貴族ぐらいのもんだろ」

「いやいや、貴族じゃねえって。貴族だったらこんな宿に泊まったりするわけねえだろ」

「ああ。もし貴族だったら今頃おやっさんは殺されてるはずさ」

「じゃあ、貴族じゃなかったら何だっただよ？ あのコートはもちろん、銅のプレートと一緒に下げてたネックレス。銀は銀でもありや白銀だったんだぜ」

「代々受け継いだり、遺跡で発見したマジックアイテムって可能性もあるだろうが」

「普通、あんなにたくさん受け継いだり、見つけたりするか？」

「そういや背負ってた剣もすごかったな。あんな綺麗な剣、見たこともねえよ。やっぱり名のある貴族さまだろ」

「分けありの貴族ってか？」

飛び交う会話の話題は、全てアダムについて。

冒険者ご用達の宿屋だけあって、商売敵かパーティの仲間になる可能性のある新参者の冒険者に対する興味は誰よりも強い。

ワイン片手にアダムが消えていった階段のほうに視線を向けながら、冒険者のひとりがふと呟く。

「あいつ、強えのかな？」

モンスター退治を主な仕事として請け負っている冒険者だからこそ、誰しもが一番気になる場所であり、重要なことである。

「強さね……。そういや、いつもてめえらが新人相手にやってたアレ。今回はやらなかったんだな？」

店の主人から発せられたその言葉に、一番近くの丸テーブルで酒を飲んでいた大男が大げさに首を振りながら返す。

「勘弁してくれよ、おやつさん。いくら新参者の冒険者だからって貴族かもしれねえ相手にケンカなんて売れねえよ」

大男の近くのテーブルで酒を飲んでいた男も、大男の言葉に賛同するようにうなずいた。

「ああ、そうだそうだ！ ちょっとケンカ売ったぐらいで拷問されたり、殺されんのは勘弁だぜ」

「まったくだ。仕事以外で貴族なんかに関わりたくもねえ」

日ごろモンスターを相手に戦う冒険者にしては情けなく聞える言葉だったが、主人も「そりやまあ、そうだな」と同意する。

アダムを怒鳴りつけた主人も、宿屋の主人として長年の経験で培われた『人を見る目』がなければ、例え最低ランクの冒険者であってもプライドを棄て、態度を改めて接していただろうと思つて。

それほどこの世界において特権階級に属する人間の権力は強く、貴族の横暴さや理不尽がまかり通る世の中だということを、平民たちは嫌というほど理解していた。

まあ、アダム本人は「異世界の街に馴染めるよう、目立ちすぎないよう服装に着替え



る」という発想がただ単純に存在しなかっただけで、貴族と勘違いさせて無駄なトラブルを避けるなどという考えは微塵も存在していなかったが。

### 第3話 眷属であり、下僕であり、仲間。

木の扉を閉め、ふうつと息を吐く。

「やつと屋根があるところで寝れるのか……」

異世界転移から2日。ようやく雨風を凌げる部屋で寝れるようになったことに感謝し、長剣を仕舞ったアダムはベッドに座る。

部屋には小さな机がひとつ、そして宝箱が備え付けられた粗末な木製寝台ぐらいしか調度品のない部屋だったが、ここはエ・ランテルでも最低に属する宿屋の部屋。あまりにも不潔だったり、致命的な欠陥がない限り、文句を言うつもりはない。

小さな机に置かれた蠟燭台に、アイテムボックスから取り出した『滅らない蠟燭』と呼ばれる下級光源アイテムをセットし、最低威力に調整したファイアで火をつけ、暗い室内に灯りを灯す。

「ふう……」

一息吐いて、羽織っていたコートをアイテムボックスに仕舞うと、アダムはベッドに仰向けになった。

いくつものシミが見える汚い天井を見上げて、呟く。

「——仲間、か……」

仲間と聞いてアダムが最初に連想するものは、デイスガイアで交流のあったプレイヤーたちではなく、NPCたちである。

C. プレイヤー1人に対して9体。課金によつて最大15体まで保持が可能だったNPC。

どこまでも上がるステータスや9999まで上がるレベルから同じ強さのプレイヤーを発見することが難しく、また、ステータスが高ければボス相手でもパーティプレイを必要としないために実装されていたデイスガイアの仕様だ。

それらのNPCは『眷属』と呼ばれ、レベル50で解放されるイベントクエストをクリアすれば、街中にホームを建てる権利と共に、最大3体まで作成する権利を得られた。全てのイベントクエストをクリアし、砦クラス以上のホームを保持するという条件を満たしているアダムが保持するNPCは、課金で追加したNPCも含めて最大数の15体。

アダムはおもむろにアイテムボックスを開くと、一番下に仕舞つてあるアイテムを見つめた。

ほとんどが『倉庫』のアイコンで埋まっているアイテムボックスのなかで異彩を放つアイテムたち。

城のようなアイコンが浮んだ、デイスガイアにおいてアダムのホームだった——『魔王城』のあとに続いて表示されている、様々な色のクリスタル。

そのクリスタルこそが、アダムが仲間だと聞いて思い浮かべたNPCたちである。

普段は自身がデイスガイアのフィールド内、もしくは課金によって作成できる惑星——惑星といつてもあくまで設定上であり、実際は平面のフィールド——で街に配置されているNPC同様、適当に配置して待機させていたが、『——崩壊する世界から脱出し、新天地を見つげるため、新たな世界を求めて魔王神は深淵へと飛び降りる』という、『アダム』としての最期を飾るための設定に殉じるため、わざわざホームである魔王城と一緒にアイテム化して、アイテムボックスに仕舞っていた。

「——こいつら、この世界じゃどうなるんだ？」

クリスタルを観察しながら呟く。

仮想世界のアイテムが現実のものと変化したこの異世界。NPCたちがどう変化しているのかは不明だった

「やっぱり現実仕様になるのか？ ……いやいや、現実仕様つてんだよ」

自分自身にツツコミ、アダムはクリスタルのひとつに手をかける。実際にNPCとして実体化させるか、させまいかを悩み、手の中でクリスタルを弄んでいると、

「——っ」

虚空の中、手にしたクリスタルから何かが伝わってきた。

「これは……何だ？」

——感情？ 想い？ 言葉？

本来心も魂も存在しないはずの、プログラムの固まりであるはずのNPCが封じ込められたクリスタルから何かが伝わってきたことに、アダムは驚愕した。

——そして、それと同時にある仮説が思い浮ぶ。

「まさか心……魂でも宿ったとでもいうのか!？」

異世界転移によるアイテムの現実化。

NPCの現実仕様とはつまり——人形の人間化だと、アダムは考えた。

「あいつらに魂が……」

デイスガイアではパーティメンバーとして、育成の対象として、ずっと大切にしていた15体のNPC。

にわかには信じられなかったが、そのNPCたちに個々としての魂や心が宿っているかもしれないことに、アダムは言い表すことの出来ない喜びを感じた。

そして、親友や恋人、子供に向けるように、愛おしそうにクリスタルを見つめ、「クリスタルのままじゃ窮屈だろう」とアイテムボックスから取り出し、実体化させようとして——、

『オイコラー！ 早くここから出せー！』

手に持ったクリスタルから怒りの感情と共に、そんな言葉が脳内で響いた。

声の主は女性で、10代後半ぐらいのもの。持ち前の負けん気の強さや傍若無人な性格が声質から窺え、荒っぽい言葉遣いも声質とマッチしていた。

アダムは無言でクリスタルから手を離し、クリスタルの下に描かれた銘を確認すると、「やっぱりか……」と息を吐いた。

——超・魔王アイドル、ラハールちゃん。

NPCが取得できる悪魔系の最上位称号だった『魔王』を冠する、悪魔と人間のハーフであり、アダムが最初のイベントクエストクリアで得た3体のNPC作成権により、最初に作成したNPC。

そのレベルは9999でカンストしており、総転生回数250回。素体ボーナスによつてレベル1の装備なしでも平均300のステータスを誇り、素質は天才。装備を含めた最終ステータスは平均9桁の前半。NPC作成時に素体として使用できるキャラクターとして有料で配信されていた、『魔界戦記デイスガイア』の主人公ラハールの女体化バージョンを基に作成されている。

これら有料で配信されているキャラクターは、他種族に転生することが出来ない代わりに、転生時に必要なマナがある一定で固定され、装備適正や基礎ステータス、武器の

適正値が始めから高めに設定されていた。

アダムは『ラハールちゃん』と表示されてるクリスタルを前に、昨夜夜通し徹夜で読んだ『魔界戦記デイスガイア』の主人公だった『ラハール』の性格や思考回路を思い浮かべ——「こつちのラハールちゃんは最初から女だし、少しはお淑やかな性格のはず」——と考え、「でも、ラハールちゃんの設定ってラハールを基にして、アイドル設定追加しただけだったよな？」——と顎に手をやった。

ラハールの……ラハールちゃんの設定を基に魂や性格が形成されたとすれば——、「クリスタルから出すのは少し……いや、かなりマズいな」

ただでさえクリスタルに閉じ込められて怒ってるらしいラハールちゃん。クリスタルから出せば何をするか検討も付かない。ただ、ラハールが登場の際にいつもやる高笑いをすることだけは予想ができた。

「って、高笑いでも十分ヤバいだろ。ひとりで宿屋に入ってたんだし、いつの間にか人数が増えてたら不信がられるに決まってる」

そういう意味では他の、戦闘や争いごとが苦手な優しい性格をした、という設定を持つNPCを出すことも無理だった。

「どつちにしろこじや無理だな。明日……一度街の外に出て、人気のないところで出したほうがいいか。——とりあえず今日のところは飯食って寝よ」

予定を決めたアダムは、ひとつひとつのクリスタルを手で掴み、「出してやるからそれまで我慢してくれよ」と思いを込めて呟き、『食べ物Ⅰ』と銘うたれたアイテムボックスを開いた。

「今日の夕飯は骨付き肉♪」

ご機嫌な歌声と共に取り出したのは、今朝、昼食としても食べた『骨付き肉』だった。肉のみ、野菜なし、3食同じメニューと不健康すぎるが、漫画肉にかぶりつける欲求には勝てなかった。

「あー、うめえ……」

きつと、明日から野菜も食べると思う。



翌朝、ようやく日が昇り始めた頃。アダムはエ・ランテル近くの森林にいた。

アダムの周りは360度、深い森林で囲まれていた。薄暗く、いかにもモンスター襲撃に遭いそうな場所だが、その代わり人の気配もない。

アイテムボックスからアイテムを取り出したり、クリスタルからNPCを実体化させたりと、人に見られたら色々とマズい行動をしようとするアダムにとって、モンスター



が出現する森林はうってつけの場所だった。

改めて人気がないことを確認したアダムは、虚空へと手を伸ばしてアイテムボックスを開く。

アイテムボックスの下に並べられているクリスタル。魔王城のすぐ隣に表示されている、ラハールちゃんが封じられているクリスタルを掴み、取り出した。

「さあ、いよいよだな」

緊張からゴクリと生唾を飲む。

プログラムミング通りに動く人形から本物の生物となったNPCがどんな人格を得たのか、どんな行動を取るのか。

「いきなり攻撃してきたりとかはないよな？」などと不安を抱きつつ、それでもアダムはクリスタルを実体化させる。

デイスガイアでの使用法と同じく、クリスタルを目の前の地面に放ると、ボンツという小さな爆発音が鳴り、あらかじめ設定しているエフェクト——紫色の煙が立ち昇った。

その紫色の煙が消えると、NPCの全体像が——、

「——っ!?!」

突然、紫色の煙を裂くように両腕が伸ばされた。腕は的確にアダムが羽織っている

コートの襟を的確に捉え、ぐいっと煙の内側へと引き寄せる。

そこでアダムの視界に映ったものは、赤い瞳――。

地獄の底を流れるマグマのような、暗さを持ち合わせた真っ直ぐな瞳だった。

「ら、ラハールちゃん……?」

お互いの呼吸だけでなく、体温さえも感じられる超至近距離。そんな超至近距離まで引き寄せられたアダムは息を飲む。

怖ろしく整った顔立ち。

吊りあがった眉毛に、ギラギラとした赤い瞳、小さい鼻に、不機嫌を隠そうともしない口元。

デイスガイアという仮想世界内では見慣れているラハールちゃんの顔だが、現実のものとしてそこから表情や意思が感じられると、また変わってくる。

どうしてもNPCではなく、ひとりの人間――この場合、悪魔と人間のハーフ――はもとより、女として意識してしまう。

その現実を前にアダムは戸惑い、口を閉ざして固まってしまふ。

一方のラハールちゃんはそんなアダムを無視して口を開く。

「遅いっ!」

「……へ?」

「新天地とやらにはもうとつくに着いたのであろうっ！ なぜすぐに出さなかったのだ!?」

「すぐって……まだ異世界に来て3日だぞ?」

むしろ早く出してやったほうじゃないか、とアダムは思ったが、ラハールちゃんからすれば遅すぎたらしい。

「来た時点で解放しろー! 全く、オレのマスターのクセして……」

怒鳴り声をあげ、ぶつぶつ呟くラハールちゃんは呆れるように大きく息を吐いた。無雑作に腰まで伸ばした、青みがかった紫色の髪と、頭の上で揺れる2本の触覚のような、長いアホ毛を揺らし、ゆっくりとアダムの胸ぐらから手を離す。

離れたことで見えたラハールちゃんの全体像は、黒地に赤い炎がプリントされた革のビキニに、赤いジーンズという、露出がやや高め of 格好だった。

アダムに背中を向けたラハールちゃんは面白くなさそうに地面を蹴った。拗ねているようだ。

(……これは慰めたほうがいいのか?)

まだラハールちゃんがどんな性格だったか、人格をしているのか把握できていないアダムには、どうすればいいかわからない。

とりあえず、DMMORPGデイスガイアのラハールちゃんもとい、原作小説で読ん

だラハールの性格や思考回路を思い出し、それを基にアイテムボックスを開く。

刺激しないよう、恐る恐るラハールちゃんに近寄り、アイテムボックスから取り出したものを差し出した。

「ラハールちゃん、これで機嫌直してくれないか？」

「なっ……こ、これは!？」

「竜王の肉を調理した骨付き肉——『G級骨付き肉』。ラハールちゃんの好物だろ？」

アダムが昨日食べた骨付き肉よりもランクが高いの食品アイテムであり、そのサイズも大きく重量は10キロもあった。

「おおおおおおっ！」

だからだと涎を垂らしながら、アダムの手から骨付き肉を奪い取る。こんがり焼き目の付いた骨付き肉に豪快に食らいつき、ガツガツと食べ始めた。

「美味い！ 美味いぞおおおー！」

「それは良かった。じゃあ、あともう1個やるから機嫌直してくれよ？」

ラハールちゃんは夢中で食べながら頷く。もうひとつの肉を早く寄越せとアダムの手から奪い取った。

両手それぞれ持った大きな骨付き肉にご機嫌でかぶりつくラハールちゃん。口いっぱい肉を頬張るその姿にアダムは頬を緩めてほっこり和み、同時に高級の食品アイテム

ムを貰ったからといってすぐに機嫌を直したラハールちゃんがちよつとだけ心配になった。

(ま、機嫌を直してもらったんだからいいか)

ラハールちゃんから視線を外し、アダムは再びアイテムボックスに手を突っ込む。

ラハールちゃんのクリスタルがあつた場所の隣——2つ目のクリスタルを取り出して、地面に放つた。

ラハールちゃんの時同様に小さな爆発音が鳴り、今度は白い煙が立ち昇つた。

すうーつと消えた煙が晴れると、そこには金髪的女性が立っていた。

腰下まで伸ばした煌く金色の髪を赤いリボンで縛つた、顔立ちの整つた美女だ。

黒を基調とした豪華なドレスに身を包んでいて、大きく開いた胸元からは透き通るような白い肌が豊かな胸と一緒に覗けていた。

三角に尖つた耳に、その美しい顔立ちと肢体が相まってエルフのようにも見えるが、彼女の背中からはコウモリのような翼が生えている。

——魔王の娘、ロザリー。

『魔界戦記デイスガイア2』のヒロインである『ロザリンド』を基にラハールちゃんと同じく作成された、最初の3体のひとり。

種族は悪魔で、称号は『魔王』。レベルは9999で総転生回数255回。素体ボーナ

スによってレベル1の装備なしでも平均300のステータスを誇り、素質は天才。最終ステータスは平均9桁、アダムが所有するNPCでも最強の命中力を有するNPCであり、得意武器は命中力と俊敏が攻撃力となる『銃』。ラハールちゃん同様、NPC作成時に素体として使用できるキャラクターとして有料配信されていた。

ロザリーは周りをキョロキョロと見ながら呟く。

「ここが新天地か。元いた世界と何もかわらぬようじゃのう」

(……ロザリーには現実化した異世界も仮想世界と変ってないように感じるのか?)

まあ、仮想世界でも元NPCのロザリーにとっては現実と変わらない場所なんだし、当然と言えば当然なのか?)

そんな思考を巡らせるアダムにロザリーは声をかける。

「のう、アダムよ」

「……なんだ、ロザリー」

「妾たちの城はどこじゃ?」

「……城? 魔王城のことか?」

「いや、新天地での妾たちの居城じゃ」

「……は?」

ロザリーの言葉にアダムの目が点になる。

——城。

新天地、異世界での居城。つまり、家はどこかと聞いている。しかも冗談ではなく、本気で。

「む？ もしやないのか？」

きよとんとしながら聞いてくるロザリー。「んなもんねーよ！ まだ転移して3日目だし、昨日やつと宿屋借りて野宿から解放されたとこなんだよつ」と、アダムは反論しそうになるが、それではあまりにも格好が悪い。

アダムはアイテムボックスを弄るフリをしながら弁解する。

「まだ転移から3日経ったばかりだからな。この世界の情報が全くない今は、どこかに居を構えたりしたくないんだ」

「ふむ……確かにそうじゃな」

「……納得してくれたか？」

「うむ」

ロザリーが頷いたところで、アダムはアイテムボックスから新たなクリスタルを取り出した。見ようによってはロザリーとの会話を強制終了させたようにも見えたが、実際その通りである。

アイテムボックスから取り出したピンク色のクリスタルを、地面へと放つ。

ボンツという小さな爆発音と同時に紫色の煙が立ち昇る。

煙が晴れるのと同時に現れたのは、煌びやかな輝きを放つ金髪を後ろでまとめてアツプさせた、翡翠色の瞳をした20代前半ぐらいの貴婦人。

ロザリンドとはまた違ったデザインの赤を基調とした豪華なドレスで身を包み、手には扇を持つている。大きな胸とくびれた細い腰、丸い尻にと、非常にスタイルがよく、顔立ちもハツキリと整っていて、絶世の美女という言葉が相応しい女性だった。

宝石のような翡翠色の瞳がゆっくりとアダムに向けられる。

女性の視線がアダムの視線と合わさった瞬間、女性がニツコリと微笑んだ。

男性ならその微笑みを目にしただけで虜になっってしまうだろう。そんな微笑みを向けられたアダムは思わず顔を赤らめてしまう。

仮想世界はともかく、現実世界ではまずお目にかかれないだろう絶世の美女にどう声をかけたものかと悩んでいると、

「ん〜……やっぱりの格好って肩が凝っちゃうのよね〜」

大胆にも女性は身に纏っていたドレスを脱ぎ捨てた。

「ん〜……」

全裸のまま、何も隠そうとせず気持ち良さそうに伸びをする女性。その豊富な肉体と完成された美を前に、驚くことも忘れてアダムはだらしなく表情を緩め、見惚れてし



まう。

そんな、創造主であり自身を育て上げたアダムの姿を見て、女性は呆れるでもなく、失望するでもなく、嬉しそうにニッコリと微笑む。ゆっくりと近づき、その豊満な肉体をアダムに押し当てる。

それは明らかなハラスメント行為だったが、やはりGMからの警告はなかった。そもそもデイスガイアでは装備の下にNPCが着ている服は着脱不可能のはずである。

「お、おい……」

「あら、どうしたのダーリン」

「……ダーリン？」

押し当てられている女性の豊満な肉体にどぎまぎしつつ、アダムはダーリンという呼び方に首を傾げ——そういえばそう呼ぶように設定してたな、と思い出す。

アダムは顔を赤らめたまま女性——メルチェリーダの体から視線をどこかへ逸らして呟く。

「メルチェリーダ。とりあえず何か服を着てくれるか？」

現実世界においてごく普通の26歳の男だったアダムが、メルチェリーダのような絶世の美女の裸——しかも押し当てられている状態では落ち着いて話をする自信がなかったから出た言葉だったが、メルチェリーダはピンク色の唇を不満げに突き出した。

「えー……せつかく脱いだのにい」

「頼むよ。ドレスじゃなくてもいいからさ」

「む、わかったわ」

メルチェリーダはしぶしぶとうなずき、アイテムボックスを開いた。

NPCにも存在するアイテムボックス。プレイヤーとは違い、所持できるアイテムは30種類と少なく、拡張アイテムである『倉庫』も最大3つまでしか入れられないという制限が存在した。

メルチェリーダは脱ぎ捨てたドレスをアイテムボックスに仕舞い、続いて装備品・防具に分類されているアイテムを取り出した。

取り出したのは、何かの革で作られた紫色のレオタード。ところどころに露出が目立ち、女性の体の魅力を最大限に引き立たせるような大胆な衣装だった。

防御力なんてとても期待できそうにない衣装だったが、それは見た目だけ。性能はメルチェリーダが保有し、装備する防具のなかでもダントツの性能を誇る装備アイテムだ。

メルチェリーダをレオタードに着替え、改めて周囲を見回した。もちろん、アダムの腕に自身の腕を絡めて胸を押し付けのを忘れない。

「へー、(´▽｀)が新天地なのね」

「……ああ。俺もまだ着て3日目だからまだ未知の部分だらけだが、近くにエ・ランテルという街があるんだ」

「街！へえ、そうなの。かわいい女の子はいるのかしら？」

「……さあな」

まだ見ぬ異世界の女に向って艶っぽく唇を舐める姿は、もはや貴婦人からはかけ離れている。服装からして痴女、行動や言動も淫乱女のように。

しかし、彼女の種族をかんがみれば当然の振る舞いだろう。

——夢魔族。

男を誑かす悪魔であり、サキユバスという呼び名が有名な種族。その種族の外見的特徴は、男を虜にするような美しい顔立ちと女性らしい体つき。それらに加えて、頭のこめかみ付近から生える山羊のような角に、お尻から生えた、先端がハートのようなになっている黒い悪魔の尻尾と、腰の辺りから生えたコウモリのような翼である。

ちなみに夢魔族は『魔界戦記デイスガイア』シリーズにおいて最初から最新作にいたるまで長期にわたって登場し、下僕・眷属として作成・使用することのできる種族であり、特殊技や魔法、魔ビリティ、外見においてもお色気を重視した魔物系に属するキャラクターである。

そしてNPCメルチェリーダは、『魔界戦記デイスガイア』シリーズの4作目、オメガ

クールのエフェクトとしてコラボした『ロッテのおもちや』——サキュバスのお姫様、アスタロッテ——ラハールちゃんやロザリンドと同じく有料配信された『アスタロッテ』というキャラクターをベースに外装や設定を原型がほとんどなくなってしまうほど弄りまくり、アスタロッテの母親で女王の『メルチェリーダ』を再現したNPCだった。そのため普通の夢魔族にあるはずの角がない。

ちなみにレベルは9999。総転生回数は270回。素体ボーナスによってレベル1の装備なしでも平均300のステータスを誇り、素質は天才。最終ステータスは平均9桁、アダムが所有するNPCでも最強の魔法防御を有するNPCであり、魔法や回復などの後方支援が得意。ベースとなる拠点においても『院長』という役職に就いていた。

「相変わらずじゃな、メルチェリーダよ」

大きな胸の谷間にアダムの腕を挟みこむようにしてしがみついているメルチェリーダに向って、ため息を吐きながらロザリーが声をかける。

メルチェリーダはピコピコと頭の上で揺れる金色のアホ毛を揺らし、声のほうへ顔を向けた。

「あらロザリーじゃないの。あなたも出してもらったの？」

「まあ。ラハールちゃんもおるぞ。ほれ、あそこじゃ」

言いながらロザリーは指をさす。

夢中で骨付き肉に喰らいついていたラハールちゃんはロザリーの言葉に顔を上げ——メルチェエリーダと視線が合った瞬間——表情を引きつらせた。

「げえっ！ むちプリ！」

骨付き肉を抱え、急いで距離を取ったラハールちゃん。そんなラハールちゃんの反応にメルチェエリーダは頬を膨らませる。

「もう失礼な反応ね」

「うるさい！ オレさまに絶対そのムチムチした体を近づけるなよ！ オレさまはお前みたいなムチムチしてるヤツを見ると拒絶反応が出るんだ！」

そう怒鳴るように叫ぶと、ハールちゃんはわなわなと体を震わせた。その過剰反応を前にメルチェエリーダは呆れてしまい、怒る気もなくして息を吐く。

「はあ、ラハールちゃんのむちプリ嫌いも相変わらずなのね」

「うむ、自分の体にさえ拒絶反応が出てしまうほどじゃからな」

メルチェエリーダに同意するようにロザリーが頷く。そんな2人に向って文句のひつでもぶつきたくなるが、事実だけにラハールちゃんは唸ることしか出来ない。

自身を創造し、鍛え上げたアダムに助けを求めて視線を向ける——睨み付けるようにしか見えない——が、アダムはメルチェエリーダの体を押し付けられ、若干前かがみになってるため頼りにならない。むしろその情けない態度に怒りに合わせて殺気が湧い

た。

真つ直ぐ向けられる怒りの感情や殺気から、業火でも背負っているようなラホールちゃんを幻視したアダムは、ようやく顔を引き締める。

背筋を伸ばして、コホンとワザとらしく咳払いする。

「あー、そのなんだ。俺も男だからな」

「その言い訳は見苦しいぞ、マスター」

「……………」

もはや「ぐう」の字も出ない。顔を引きつらせないようにするのが精一杯だった。

そんななかで助け舟を出したのは、メルチエリーダ。

小さな赤いハートを幻視——いや、実際にエフェクトとして出現させながら呟く。

「あら別にいいじゃないの、ラホールちゃん。男なんだから仕方のないことよ。むしろ

正常に反応してくれてることに喜ぶべきなんじゃないかしら」

「まあそうじゃな。女に反応せぬようになつたら男として危ないしの」

メルチエリーダに同意するように口ザリーが頷く。

「そ、それは……」

同じ眷属である2人に言われ、ラホールちゃんはまたもや言葉を詰まらせる。

ラホールちゃんとしても、アダムが男として反応を見せないとなると困るのだ。

キャラの設定にはないものの、アダムはデイスガイアにおいてNPCたちを『自分の嫁』と称して可愛がっていた。その『自分の嫁』と称されて可愛がられた記憶を、おぼろげながら残しているNPCたちにとって、実際に女として意識されるのは至高の喜び。嫁としての役割を果たし、アダムとの間に子を宿すことは当然の義務であり、自らも心の底から望んでいることだった。

「妾はいつでも準備できておるぞ」

だから、同じく嫁であるロザリーがアダムの空いていたほうの腕を取り、そんな言葉を呟くのは自然なことだった。

——だが、しかしながら、言われた本人はあくまでゲーム内の嫁——オタクが気に入ったアニメや漫画などのキャラクターを『自分の嫁』と言うのと同じように使っていたため、実際に自分の嫁だという自覚はなかった。

ロザリーの準備の意味が分からず、アダムは首を傾げる。

「……なんの準備だ？」

「妾の口からそれを言わせよというのか、お主は」

「へえ、ダーリンだったらそういうプレイが好みなの？」

恥ずかしそうに頬を染めるロザリーに、妖艶な微笑みを浮べて指で胸板を突いてくるメルチエリーダ。少し離れた位置からラハールちゃんが悔しそうに睨んでくる。

(なんだこの状況……意味わかんねえ)

早々に状況把握する事を諦めたアダムは、大きくため息を吐く。

残りのNPCをクリスタルから解放しようと思うが、腕は両方とも埋まっていて動かせない。腕に絡みついているメルチエリーダーとロザリーを振りほどこうにも、2人の幸せそうな顔を見てしまうと、振りほどくに解けなくなってしまった。

「さてと……どうしたものかな」

フンツと吐き捨てるように顔を背け、自身のアイテムボックスに仕舞われている食品系アイテムを取り出し、やけ食いを始めたラハールちゃんを視界の端に置きつつ、アダムは空を見上げた。

(こりゃあ、15体全員をここで出したら收拾つかなくなるな……)

アイテムボックスのなかにはNPCがまだ12体もいた。